



安田社長が次世代委員会を紹介し、次の50年に向けた3つの長期課題を説明した

ハイテム50周年で「お客様に感謝のタベ」

国際養鶏養豚総合展の機会に開催

（株）ハイテム（安田勝彦社長）本社・岐阜県各務原市テクノプラザ2-10は、今年7月1日に創立50周年を迎えることから、国際養鶏養豚総合展（IPPS）2022会期中の4月28日の展示会終了後に、隣接するイベントホールで「お客様に感謝のタベ」を開催した。

安田勝彦社長は「健康の許す限り、2026年までの80代の間は一線に立ちたい」と述べ、今年

ハイテムは、今年7月1日に創立50周年を迎えること

から、国際養鶏養豚総合展（IPPS）2022会期中の4月28日の展示会終了後に、隣接するイベントホールで「お客様に感謝のタベ」を開催した。

第一の課題は、畜舎特例法施行を踏まえ、鶏舎建築物を内部設備の延長と

考え、高品質、納得価格のシステム鶏舎、ハイテムLHS（Layer House System）を軌道に乗

せること。第二の課題は、農水省がみどりの食料システム戦略で打ち出している化学肥料3割削減に呼応し、ペレット化に呼応し、ペレット化の鶏糞の活用システムに

取り組むこと。第三の課題は、世界人口6割のアジアのエッグファームオートメーションリーダ

ーを目指し、東南アジア・インド地区の販売を伸ばし、同地区への第2工場建設を視野に入れること

と述べた。

併せて、①卵を洗わない欧州生まれの直立ケーシングでの破卵問題を、本格的な機械試験鶏舎エッグハウス21で解決し、サルメットと共同設計体制を進めた経緯の15年前の新潟県中越沖地震で3棟30万羽設備の倒壊を受け、すぐに、岐阜大学と地震の開発に着手し、東日本大震災、熊本地震、北海道胆振東部地震でその性能を実証した経緯③耐震ケーシングに対する考え方と、世界人口6割のアジアでのエッグファームオートメーション製造の必要性に対する考え方の違いから、2006年に23年にわたるサルメット

の提携を終了し、自社天津工場を立ち上げ、開発・設計・品質管理は日本本社工場、製造は自社天津工場とするプラットフォームを構築し、現在に至っていること——など、同社の主な歴史を映像を使って紹介した。